

愛媛大病院の心臓弁膜症手術 支援ロボ使用 保険診療に 患者負担少なく正確

ず、肋骨(ろっこつ)間の小さな切開口から内視鏡などを挿入する低侵襲の心臓手術(MICS)を実施。通常の心臓手術より出血や感染リスクが少なく、術後の痛みも軽いため、早期退院が可能ななどのメリットがあるという。

ダ・ヴィンチによる手術では、同程度の切開口からロボットアームを挿入し、3D内視鏡画像を見ながら遠隔操作するため、MICSより立体的で精細な視野を確保できるなどの利点加わる。これまでの5例は順調な経過で、施設基準を満たしたことで保険診療が認められた。高額療養費制度の利用が見込まれ、泉谷教授は「患者負担は10万円前後だろう」とする。

弁膜症は心臓手術の3割程度を占め、高齢化に伴って患者数は増加傾向にあるという。泉谷教授は「ダ・ヴィンチを用いるための施設基準にはMICSの実績が課せられているが、技術的な難しさから取り組んでいる病院がまだ少ない。今後少しずつ広がっていくだろう」としている。

(伊藤絵美)

愛媛大医学部附属病院(東温市志津川)はこのほど、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」による胸腔鏡下弁形成術の保険診療をスタートした。病院によると、同手術での保険診療は中四国、九州では初めてで、弁膜症の一種の僧帽弁閉鎖不全症が主な対象。心臓血管・呼吸器外科の泉谷裕則教授は「患者の負担が少なく、より正確な手術操作が可能になる」とする。泉谷教授によると、同病院では以前から胸骨を切ら